



蓮通信

〒171-0052 東京都豊島区南長崎 3-9-23
事務局 ラボン・ファミユ 207 三浦功 大
電話・FAX 03-3951-5630

2007年8月31日発行 通巻69号

URL <http://www.lotusjp.com>
E-mail tokyo@lotusjp.com

8月の酷暑にはまいりましたが、皆様におかれましては、お変わりありませんでしょうか。今年の蓮の咲き方は天候に左右されたようで、地域によって、ばらつきがあったようです。例年より1〜2週間早く、6月末から7月初旬には、ピークを迎えたところもあつたようです。
webの「蓮談義」順調に機能して来ています。当会サイトを訪れている方は、是非書込みをお願いします。蓮文化を盛り上げましょう。
「蓮のQ&A」は、第3弾です。お気付きの点ありましたら事務局までお知らせ下さい。

第38回例会のお知らせ

日時 10月27日(土) 17時30分〜20時30分

蓮情報交換会

講演会 韓国 江華島 禅源寺の蓮祭り

講師 三浦功大 池上正治

場所 豊島区立勤労福祉会館

豊島区西池袋 2-37-4

電話03-3980-3131

問合せ 事務局 電話03-3951-5630

大勢の参加をお待ちしています。

『蓮文化だより12号』原稿締切

『蓮文化だより』12号の原稿締切りは、九月末日です。随筆、創作、観蓮記、研究など蓮に関するものでしたら内容は問いませんが、独創的なものを歓迎します。一人一ページを原則とし、文字数は二千から二千五百字です。二ページになる人は、五千字を限度といたします。原稿・写真はレイアウトせず、図版は多めにお送りください。図版の選択は編集部にご一任願います。

会費納入のお願い

二〇〇七年度の会費をまだ未納の方、郵便振替用紙を同封しましたので宜しくお願致します。

賛助会員 20000円

夫婦会員 8000円

一般会員 5000円

郵便振替番号 001700・5・608708

新会員紹介(7月〜8月)

加藤 健 〒四一二・〇〇三三

静岡県御殿場市神山

電話 0550・87

下村博史 〒一五七・〇〇六六

東京都世田谷区成城7

電話 03・3483

島 美佐子 〒一四二・〇〇四二

東京都品川区豊町1

電話 03・3788

飛行機の中の蓮文様

この夏、池上さんと二人で韓国を経由して中国・吉林省琿春市に野生蓮を観に行きました。

搭乗したアジア航空の機内で、客室乗務員(アテンダント)が着用する真紅のエプロンには、蓮の花が韓国風に刺繍されていて、半島から大陸へと、夏の航路を一際鮮やかに演出しています。

また、北京から吉林省延吉市に向うと、中国航空の昼食に出た弁当の箱に、蓮の花が品良く印刷されていて、蓮の旅路を楽しませてくれました。三浦記



3国を展望する琿春に野生蓮を見る

鶏鳴が3つの国に聞こえる、という場所に来ています。3国とは、中国・ロシア・朝鮮のことです。ここは中国の東北部、吉林省の延辺朝鮮族自治州にある琿春(こんしゅん)です。いり混んだ地形になっていますが、東は丘陵を境としてロシア、西は図們江(ともんこう)を隔てて朝鮮(北)です。

韓国のソウルから北京まで、飛行機で90分。そこで国内線に乗りかえ、延辺朝鮮族自治州の中心地である延吉(えんきつ)まで120分。そこから琿春までは、高速道路を飛ばして80分。そんな場所です。

緯度的に見ると、北京は秋田、ハルピンは稚内、琿春は函館にそれぞれ相当します。そんな場所へ、三浦さんと訪れたのは、蓮を見るためです。しかも野生蓮たというのです。

ほんまかいな?という気持ちだが、心のどこかにあつたことも事実です。百聞は一見にしかず!どこか優しげな色の花たちが、よく咲いていました(写真) 大まかにいえば、写真の遠景で、左の部分がロシア、右の部分が朝鮮です。(蓮談義 8月11日より) 池上記



蓮のQ&A

025

花の色は、移ろうか?

蓮の花の色は品種によって異なり、大別して白、紅、爪紅、斑、黄、黄紅などがあります。「大賀蓮」などの紅蓮系統の品種では、開花1日目の花色が一番濃く、開花が進むにつれて花色が淡くなります。この現象は、紅色が実際に退色すること、一花弁中の色素含有量がほぼ一定であることに、対し、花弁の面積が徐々に広くなることによつて、花色が淡くなったように見えることによります。

妙蓮が顕著な例で、蕾のときは淡桃色に見えますが、開花が進むにつれ、花の中心部(新しい花弁)が見えると濃紅色の品種であることがわかります。妙蓮は、一般品種と比べ、花弁はほとんど散らないので、紅色の退色に加え、花弁の面積拡大により、更に花色が淡く移る、本来の花色を隠しながら淡くなった花色を長期間我々に見せて



いることとなります。

また、京都・巨椋池由来の品種「巨椋の曙」のような退色が顕著な品種では、開花1日目は淡桃色ですが、2日目以降は白色に移ろい、「狐に化かされたような錯覚をおこす蓮」という理由から、別名「キツネ」という愛称で呼ばれていました。

黄紅系統の品種（黄蓮と紅蓮の交雑種）では、開花2日目以降、紅色の色素が黄色の色素より先に退色してしまい、残された黄色に花色が移ろいます。(Y)

026

蓮の花は、開く時 熱くなる？

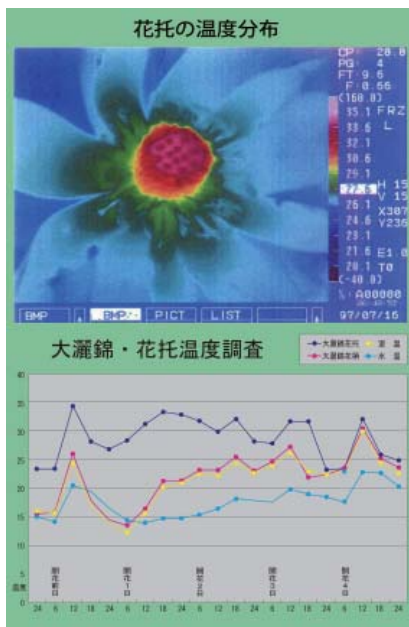
数多くある植物の中で、植物体が自ら発熱して開花するのは、非常に稀です。オーストラリア、アデレード大学のRC・セイモア准教授は、蓮をはじめ、サトイモ科の植物、オオニバスやヤシ科植物において発熱作用を、確認されました。

蓮の場合は、開花1〜2日目の花托に触ってみると、花托表面が外気に比べ、ほのかに暖かいことが確認されます。蓮は開花1日目に雌蕊が先熟して、2日目に雄蕊が後熟します。受粉は開花2日目に行なわれ、ミツバチなどの昆虫が花粉を雌蕊に運びます。蓮にはよい香りがあり、受粉作用を手伝わせるため、香りで昆虫を誘うわけですが、その成分は揮発性で、自らの花托を発熱させることにより「香炉中の燃焼した炭」と同じような役割を果たしているのかもしれない。

また、東京大学大学院農学生命科学研究所付属実験所の南定雄技官（当会会長）が、発熱作用について実験された結果、花托の内部において、開花前日から開花3日目まで

の間、盛んに発熱作用が行なわれていることを明らかにされました。推測ですが、発熱作用は雌蕊や雄蕊を成熟させるために必要な温度を保ち、また、受粉後、潤滑に受精を行なうために必要な温度を、自ら作りだしているのかもしれない。

発熱作用について、セイモア准教授は、「百年前、日本のK・ミヤケは、蓮の花の中に温度計を入れて観察した。気温が25度の時に、花の中は35度もあることを見出した」とある。これは、帝国大学の学生であった三宅驥一が、明治31年『植物学雑誌』に、英文で発表したものが、セイモア准教授の目にとまったものと思われます。(Y)



027

蓮は、お茶にできる？

誰でも開花した蓮花に出会うと、馥郁とした香りを感じるだろうと思います。この香りは花托を取り巻き、金色に輝いて見える雄蕊から発しています。開花2日目の香りが最も強く漂い、日常とは異なる雰囲気を感じます。

この時の雄蕊を切り取って、数時間水に浸け置いたり、或いは直ちにお湯（80度位）を注ぎますと、仄かな甘味と共にこの香りを体内に巡らすことが出来ます。しかし採取した雄蕊は、香りが日持ちしません。

ところがベトナムの宮中ではこの香しさを、お茶の葉に吸収させる方法を確認し、蓮茶として長年飲用していたものが今日まで伝わっています。

その方法は、多量に採取した雄蕊の上に茶葉を7度も載せ替え、根気よく香りを移すという手間のかかるものです。まさに東洋文化の粋と言えるでしょう。蓮香が融合した茶

の香味は見事なものです。（品によりばらつきがあるものの、香りはそれなりに籠もっています）。蓮香茶は急須で普通に煎じられます。君子を思わせる香は、器に臭気を染みつかせません。蓮の香りを抹香臭いと嫌がる人もたまにいます。本能や世事に関心が向いていれば、この高尚な香りを煩わしく感じるのかもしれない。

蓮葉は品種によって香りの強いもの（西湖紅蓮等）があり、乾燥蓮葉として蒸し物や包み焼きに使用されます。

日本でも蓮葉の蓮茶が、各地で生産されていて容易に入手出来ます。

販売されている乾燥蓮葉の中には、乾燥処理が粗雑だったり、日が経ち過ぎ、香りの失せた黴臭いものもあり、注意を要します。中華食材店等に置いてある真空包装されているものは、ベトナム蓮香茶に匹敵する香りまでは無理ですが、大量の蓮茶を手軽に煎じることが出来ます。また、蕾や花を丸ごと乾燥させたものもあり、これも蓮茶として出回っていることがあります。

蓮は地下茎（蓮根）や、葉、花の茎にも香りを持つ品種があります。これらも蓮茶として加工販売されています。

蓮葉の胚中には濃緑の芽が出来ており、この抜き出した芽は強い苦みを持つ蓮子芯です。中国では歴史的に漢方薬（心臓や肝臓に有効で精神安定にも効果があるとされる）として服用されて来ました。台湾の漢方薬店、韓国大邱市の漢方薬街でも扱われています。

近年ではこれを煎じ、蓮芯茶として飲用され、蓮子芯を抜いた実は、料理や菓子、また粉末にし利用されています。

このように文化的に優れたものを伝承し、供給出来る体制こそ、真の意味で成熟した社会と申せましよう。(T)

